

ヴァイオリニスト TAIRIKU の戯言

〔第2回〕

『弦が揺れると、僕は季節の風になる』

文 佐田大陸

Text by Tairiku Sada

演奏家ではなく、音楽家になれ!

TSUKEMENを育ててくれた当時の社長が、オリジナル曲を作れと言ってきた時には本当に驚きました。

ユニット(バンド)が「オリジナル曲を作ってそれを主にプレイしています」と言ったら、あなたはどう思いますか?

「へーそうなんだ、珍しいね」となるのか

「え? 当たり前じゃん」と思うのか。

まさにTSUKEMENは今オリジナル曲を主に演奏していますが、大体の人は後者の意見を持つのではないのでしょうか。

作曲家が別において、アーティストに楽曲提供する場合もありますが、多くのバンドでは、自分達が訴えたいことや考えていることを歌詞やメロディーに乗せたオリジナル曲を聴衆に届けるのが自然な形です。

しかし不思議なもので、僕が生きてきた世界ではほとんどが前者の感想を持ちます。まず、ヴァイオリンとピアノというクラシカルな楽器を生業にしている人のほとんどが作曲をしようとしません。

その理由として、クラシックの世界では、演奏家と作曲家が明確に分かれており、シンガーソングライターによ

うに、1人で作詞、作曲、編曲と全てを自分でする文化がほとんどないからです。

作曲家の作品が優れているのを前提に、作品の良さをいかに引き出すか、ということに命をかけているのがクラシックの演奏家です。

実際バッハ、ベートーヴェン、モーツァルトといった、歴史に名を残し、何百年も作品が残っている偉大なる作曲家が沢山います。

そんな中、クラシック専門の作曲知識や技術の無いプレイヤーが作曲してそれを披露でもしようものなら「おやおや、彼は何を浅い事をやっているのだね」と言われてしまいます。

「作曲家は作曲家、演奏家は演奏家、演奏家風情が生半可な気持ちで作曲なんぞに手を出すのではない」

そんな無言の風潮を、僕自身気がついたら学生時代にずーっとネリネリネリネリ刷り込まれてきたわけです。

今でこそ、演奏家もオリジナルを作る事に抵抗は少なくなってきたように思いますが、まだその名残はあるように感じます。

当時は自分の作品に自信を持たず、本当にこれで良いのか、これではあまりにもチープではないか、とそんな事

ばかり考えていました。

等身大の自分を表現する。そして、自分の感じていることを背伸びせずに表す。そうしようと思えるようになってきたのは最近のことです。

「呪縛」から解き放たれるまで本当に長い年月がかかりました。

クラシックでもない、ポップスでもない、ありそうでなかったオンリーワンのジャンル。手探りですが、それを探す旅が始まっています。

正解が無く、自分で答えを見つける。大変で困難な道なのですが、だからこそ「生きがい」「やりがい」に繋がると思っています。



profile

2010年3月に桐朋学園大学音楽学部大学院を修了。
2ヴァイオリンとピアノのアンサンブル・ユニット「TSUKEMEN」のヴァイオリニストでリーダー。
2010年キングレコードからメジャーデビュー。
結成9年目にして450本以上の公演を海外や日本全国各地で開催、現在までにのべ35万人を動員している。